

かえるのうた

第11号 2017・9月

ほんにかえるプロジェクト発行

汪楠責任編集

設立二周年記念号



ギリシャの海 西原瑛子さん作

創立2周年記念号

ほんにかえるプロジェクトは2015年9月30日に創立しました。おかげさまで2周年を迎えることができました。厚く御礼申し上げます。

今月号は記念号と称し、本来ならば支援してくださっている方々にご寄稿をお願いするところではありますが、会計システムの変更期にあたり、ご寄稿をお願いする余裕もなく、ボランティアスタッフの皆様にご寄稿をお願いしました。どうかご理解ください。

自分の命を救うことができる

正しい人がその正しさから離れて不正を行い、そのゆえに死ぬなら、それは彼が行った不正のゆえに死ぬのである。しかし、悪人が自分の行った悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、彼は自分の命を救うことができる。彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。

—エゼキエル 18/25-28—

エゼキエルは紀元前7世紀頃のユダヤの預言者です。預言とは神の言葉を預かって人々に告げることです。

救い主イエス・キリストも宣教の第一声は「悔い改めよ、天の国は近づいた」でした。

主の先駆者聖ヨハネも同じ言葉で救い主の到来を告げました。

悪への傾き、誘惑は人類の歴史と共にありました。多くの聖人を輩出したいとなみは多くの悪との共存と葛藤の戦いでした。

十字架上で主が亡くなる時、傍らの盗賊は“改心”のゆえに“今日あなたは、私と共に天国にいるだろう”と確実な赦しの証をうけました。まことの改心は神をも動かします。

改心からまだ遠くにいるとき、改心する力を願いましょう。



システイーナ礼拝堂

代表あいさつ

田中伸彦

逝く夏の そら稲妻に 裂かれゆき
我が驕慢を 揺らす雷鳴

汪さんの立ち上げた”ほんにかえるプロジェクト”に関わるようになって、早くも2年が経つのですね。

10年前の今頃、私は東京の西のはずれで路上暮らしをしていました。その時に助けられたボランティアグループを今は手伝わせて貰っています。そしてある偶然の出会いから汪さんとの付き合いが始まりました。

日々、公園や路上で暮らす人々と接しながら、自分の中に湧き上がる思いを持って余しています。

今ある自分の他者や世間に対する向き合い方にある種の不遜さや驕りがいつもつきまとうような気がしています。

たまに私のところに届く収監されている人たちからの手紙を読むにつけ、また返事を書いている時も、“私は誰で、何をやっているのか”との思いが頭を離れません。

汪さんや井手シスターのひた向きさと熱意を間近に見ながらプロジェクトに参加していますが、いつも気持ちは揺らいでいます。

路上で暮らす人々との日々も、プロジェクトの活動も、そこに立会った以上出来る限りのことはやり続けていきたいと思えます。

こうじゃなければ、ああしようとか、

ああじゃなければ、こうしようとか。そういう事では無く、自らの重みの掛かる方へ足を踏み出して行く。そんな思いで、やって行く積もりです。ほんにかえるプロジェクトに関わる全ての人々の熱き思いがいつ迄も続きますように。

副代表あいさつ

創立2周年を想う

井手愛子 s.c.q.

“更正支援”を掲げて、「ほんにかえるプロジェクト」は発足しました。支援は①無償本提供②ネット検索③文通の3本柱です。

当初、本が集まるかどうかを心配したのもつかの間、今では、数千冊が汪氏手作りの書棚に、びっしりと並んでいます。ネット検索は手間隙かかり苦慮していますが、なんとか対応しています。

文通は時間と心がとられます。重い内容が多く、3日ばかりで1通だけ書いたこともありました。来信は批判と怒りから、感謝の言葉へと変わってきています。

2年経ったいま、手にした宝物が2つあります。堀の中のかえるメイトと信頼関係が構築されつつあること。

もう一つはスタッフメイトのなかに関わりやすさと配慮に根ざした友情があることです。安心していられる場が生まれました。皆様を迎えられるように！

事務局長あいさつ

汪 楠

私は2014年6月に13年の刑を務め、満期で出所しました。刑務所は2回目ですが、少年鑑別所にはじめ、少年院、少年刑務所、入国管理局の収容所を入れますと、約20年もいわゆる施設暮らしを送ってきました。

このような過去を持ちますので、更生については常に考え、そして残念ながら常に失敗してきました。その自分は今回の長期刑を務めるにあたり、未決拘留のうちから真面目になるのにはどうしたらよいかを考え、真摯に家族を含め、支援者の方々と話し合いました。そして当初から家族以外の方の支援を受ける形で服役するようになり、出所後は新しい人生を手にすることができました。

この体験を生かし、なお更生したくても、いろいろな事情で再犯してしまう可能性がある元受刑者と、更生したくてもどうしてよいかわからない受刑者の苦しみを社会に伝え、ともに考え、ともに更生していくというコンセプトで「ほんにかえるプロジェクト」の設立を呼び掛け、支援者の協力のもと、実現することができ、2周年を迎えることができました。本当に感無量であります。

この2年間、自分自身も団体としても多くの問題に直面し、今なお多くの問題を抱えています。それを乗り越えることができたのは支援してくださっ

ている方々のおかげと心から感謝しています。そして憚らずに言えば、自分自身の努力もありました。

2周年を迎えて、本当にありがとうございます。困難もたくさんありましたが、それ以上に支えられ、感謝せずにいられないほど苦難の2年でした。

当事者だからわかることがあります。また当事者だからこそわからないことがあります。いま、ホームレスの方、何らかの障がいを持つ方とともに、支援を受けながら活動しています。運営資金の約70%を自分で負担するという無謀なやり方でいつ解散になってもおかしくない状態にあります。それでも挫けることなく活動しているのは簡単に言えば使命感でしょう。

私たちは人間です。今学んでいるロゴセラピー的にいえば人間とは責任ある存在です。責任とは何か、それは人それぞれでいいと思います。何らかの責任を持つ存在が人間というなら、私はまず自分の人生に責任を持ちたいと思います。更生とは何かを考えると、この責任という言葉がしっくりくるのではないでしょう。

2年間活動して、身に着けたのはこの責任という言葉かもしれません。この言葉を忘れずに今後も頑張りますので、どうかよろしく願いいたします。

そしてあらためて支援者の皆様、散々迷惑をかけたスタッフ、さらに辛抱強く対応を待ってくれた受刑中のかえるメイトに感謝致します。

ありがとうございます。

スタッフあいさつ

私にできること

かえる工房担当 西原瑛子

わたしは30年ぐらい、腰痛にたえてきました。手術できないと言われてきたから、我慢していました。”腰なんて誰だって痛い！膝なんて誰だって痛い！”といわれるので痛いといわないで過ごしてきました。

痛みというもの、ひとのいたみと、自分のいたみをくらべることはできません。だからわたしも人のいたみはわかりません。

私の痛みはぎゅっと圧縮されるような痛さでした。両足の裏はしびれ、夜中に両脚一度につれていました、そして上向きになると腹部が引き攣る痛さでした。

4年前から脊椎の手術は凄く進歩して80歳でも90歳でも手術できると聞き、決断しました。背骨がS字状に曲がって、血管も曲がっているので第1から5までの腰椎と骨盤までのあいだに人工骨をいれ、チタンのボルト14本で固定しました。6時間かかりました。

他の病院で9時間かかった人もいますが、今はリハビリの病院に移っていますが、私の受けた手術はすすんでいるので6時間ででき、技術がすぐれてい

るのだそうです。そういうわけで目下入院中です。

9月はほんにかえるプロジェクトを汪さん、田中さん、井手シスターによって設立されて2年の記念の月です。はじめ、安い検索料で検索の便宜を図り、ご希望の書籍を送る事業を始めると聞いて、わたしはできないと思ったので、断りました。

なにかできることはないかということで、素人ですが絵を描かせていただき、季節の草木や鳥、魚、虫などを便箋やカード、はがきなどにいれて売ることになったのです。今では獄中からの注文もあり、感謝しています。

こうして入院中も親切な仲間がラインで花や風景を送信してくださるので、病床のちいさな机で絵を描いています。みっともないコルセットをつけて外出はできませんが、家で絵を描くことはできます。このぐらいしか役に立ちませんが続けてゆくつもりです。どうか買ってください。



ひとすじの光

会計責任者 松永忠夫

長い、本当に長い時間、一筋の光も見えない。昼間なのか夜なのかすら分からない道を私は歩いていた。時には穴に落ち、時には何かにつまずき、そして倒れたりしながら歩いていた。

そう、あの事件を起こしてしまった時から、私はこの暗くて、先の見えない道を歩き続けた。

だけど、ある時、一筋の光が私の足元を照らしてくれるようになった。その光が増えていき、今は無数の光の輪が私を人が歩く道へと導いてくれるようになりました。

先になったりしながら、私が何かにつまずいて倒れないように足元をいつも照らしてくれている。それはほんにかえるプロジェクトのスタッフや会員の方々の存在でした。

私のような罪深い者に、自分ではもう絶対に二度と光を見ることはないと思きらめていました。幼少のころに見ていた光を見させてくれている人たちに感謝しています。

私を絶望から救ってくれたプロジェクトの存在は、きっとほかの絶望の荒野でさまようものをも救えると確信しています。そして私自身もその光のとなりたいたいと思い、脳梗塞後遺症と闘いながら、活動に参加するようになりました。それが極悪人だった私の務めでもあり、自分が犯した罪に対する償い

の一つでもあると思っています。

私はまだまだ一人で人の道を探ることができていません。スタッフの方々、会員の皆様、どうかこれからも以前の私のように真っ暗な道を歩んでいる人たちに一筋の光を照らしていただけるよう、お願いします。

幼少のころ、一人一人の方が見えていた、あの美しい光をまた皆がみられるように、大勢の人たちが歩んでいる道をまた歩けるように……

~~~~~

## 許しと希望

会計担当 魚住美千代

2016年6月の終わり。何十年か振りに同期4人と誘い合わせて、高校時代の恩師であるSr. 井手を尋ねました。懐かしい思い出話に花が咲くのかと思いきや、3時間以上にわたって、シスターがいま取り組んでおられる「ほんにかえるプロジェクト」のお話をされ、帰るころには、私たち女子校時代をともに過ごした4人全員、「私達にできることなら…手伝います!」と、シスターの揺るぎない気迫に押されて戸惑いながらもうなずいていました。

手伝います、といいながらも、これまでの人生で、受刑者という塀のなかの人々とまったく無縁の生活をしてきた私は、正直ちょっと怖いと思いました。それでも、シスターがおっしゃった「イエス・キリストは、社会の暗い

ところにおいやられた人にも手を差し延べよ、と言われたでしょ。」という言葉は胸に響いていました。

それから後、汪さんや出所してきた仲間たちやスタッフの皆さんと講演会などを企画していくうちに、罪を犯すひとのほとんどが、幼少の時から親との関わりが希薄だったりうまくいっていなかったりすること、本当に生き直したいと願っている人にとって、社会の支援は必須であること、人は希望をもって生きる権利があること、ひとを許すことは恨みという自らの心の重荷から自らを解放することなのだという事…などなど、いろいろ考えさせられました。

今は、主に会計のお手伝いをさせていただいていますが、Sr. 井手や、プロジェクトのスタッフや仲間たち、そして支援して下さる方々、講演会に毎回参加して下さる方々は、きっと、ただひたすら「苦しんでいるひとや求めているひとの力になれば」というキリスト教でいうところの愛の精神によって動いているのだろうな、ということが感じられるようになりました。

それなら私もそんな生き方を見習いたいと、とてもシンプルな気持ちで、いま関わらせていただいています。これもご縁。天からのお導き。そう思ったら怖い気持ちも消えて、楽しくなってくるのですから不思議です。

## 活動を通じて

実務担当 板倉一英

私は昨年の6月からほんにかえるプロジェクトの活動に参加するようになりました。当初は会務を覚えるのに必死で、正直に言えば塀の中の方の気持ちを考える余裕もありませんでした。ただ自分にできることを見つけ、いかに皆さんに迷惑をかけないようにするかに心がけていました。

私には服役の経験もなく、活動に参加するまでは、悪いことをしたのだから、刑務所に入るのは当たり前と思っていました。しかし、この活動に参加するようになり、服役の経験ある当事者スタッフのお話を聞き、また受刑中のかえるメイトからのお手紙を読んでいるうちに考え方も変わりました。

塀の中の生活は決してネットで書かれているような快適なものではなく、むしろ想像以上に厳しく、反省を促すには程遠い環境であることをも理解できるようになりました。

しかし、理解を深めたと同時に、この活動は果たして誰のためにやっているのか、という疑問をも持つようになりました。

事務局では想像以上に多くの会務に追われています。メインの書籍発送作業だけでも深刻な財政難のため、あらゆるところで経費を節約しなければなりません。

例えば梱包。角2封筒を使用することが多いのですが、文庫本のような小

さいサイズの本を送るときは封筒を2つに切り、時にはツギハギしながら梱包していますし、厚さの制限があるため、厚みのバラバラの本を工夫して組み合わせ、できるだけ送料を抑えることに苦しみます。時には本の表紙を外すことで厚さ制限をクリアし、時には本を開いて送ることもあります。はじめの時は会員からクレームもありましたが、こうすることによってもっとたくさんの本を送ることができると説明し、今では皆さんに了承していただけるようになりました。

厚さの制限は郵便局との契約によるものですが、もう一つは冊数の制限であり、これは刑務所側の恣意的な内規によるものです。以前は段ボール箱で本を送ることができたのですが、検閲するのが面倒というだけの理由で、多くの刑務所では送り主一人当たり、1日3冊しか送ることができないようになりました。これではますます受刑者の読書の機会を奪い、生き方を学ぶ上でとても有意義な考える機会までも奪ってしまいます。

この制限をクリアするためには送り主を増やせば済むと受刑者にも思われがちですが、だれの名前でも送れるレターパックの値段は360円。契約者の名前では送れないクリックポストは164円。年間で1300回も送るプロジェクトにとっては25万円もの差が出るので、あんまりにも大きすぎます。

一見リクエストされた本を送るだけの簡単な作業に思われていますが、な

かなか大変な作業で、組み合わせによっては送料がかなり変わるからです。

事務局にはほかにも多くの地味で根気がいる会務があります。作業のスピードを上げればミスが生じます。ミスが生じれば迷惑をかけることになります。そのミスの修復でさらに時間を要します。これが原因で主力スタッフが辞める事態にもなります。

何かと苦勞の多い活動ですが、実りも多くあります。特に受刑中の方からの感謝の言葉をいただいたときは、役に立ってよかった、活動に参加してよかったと思う。いつか松永さんもおっしゃられたように、感謝の気持ちを持つようになると人間は変われるのです。1年半も活動に参加していますと、本の無償提供を受け、感謝の言葉を自然と書けるようになった方は、その後は必ず心情を書いてくれるようになり、出所後の生活に対しての不安をつづいた後に真面目になりたいというようになります。このような変化を目の当たりにして、この活動に参加できて本当に良かったと思うようになりました。

塀の内外を問わず、日々大変だと思いますが、この活動を継続していけるようにもっともっと一丸になり頑張りたいと思います。

最後になりましたが、受刑中の方、どうか希望を持ち、だれでも変われることを信じ、そして自分自身を信じ、1日でも早くまっとうな一員として社会復帰されますように、心からお願い申し上げます。



## 新しい道

広報担当 早川純子

ほんにかえるプロジェクト発足2周年、おめでとうございます。

副代表のシスター井手と再会したのは、ちょうど1年前。その際に、このプロジェクトのお話をうかがい、スタッフとして関わることになりました。シスター井手は、時には怖く、時には優しい中高時代の大切な恩師、断れる訳はありません(笑)

かえるプロジェクトでは2ヶ月に1回、ひとりでも多くの方に活動内容を知ってもらおうと、シスターが所属する修道会の修道院で上映会や講演会を開催しています。事前に配布するチラシの作成、当日の会場設営、進行、物販など、微力ではありますが、お手伝いをさせていただいています。参加された方々との座談会もあり、3時間半ほどの活動ですが、学びのある、実り多い時間です。

塀の外で、一生懸命、みなさんの事を考え、活動している人たちは確かにいます。罪を犯した事実をしっかりと受け止めながら、新しい道を歩もうとする決意を応援し、手助けする人たちは確かにいます。知らない者同士ですが、ちょっと想像してみてくださいね。

田中代表、シスター井手副代表、汪楠事務局長、西原瑛子さんを初め、スタッフ一同、みなさんのことをいつも心にとめています。

出所されたら、ぜひ、講演会に参加してください。お待ちしております。

## 透明な会計

会計担当 上島真理

『ほんにかえるプロジェクト』に参加させて頂くようになって半年になります。

半年前に、高校時代の友だちに誘われるまま『ほんにかえるプロジェクト』のイベントのお手伝いに参加させていただき、今は会計処理をメインにお手伝いをさせていただいています。

更生支援と言う、私の日常生活ではあまり接点のない営みでしたが、日々、ほんの少しのボタンの掛け違いや、出来心で、人生何が起こるかも分からないとも思っていました。

日々の生活を送っていると、色々な思いにかられる事がたくさんあります。それが、何かのきっかけで、ほんのちよっと角度が変わってしまったら、自分も家族も、いつ受刑者と呼ばれる立場になるか分からないと言う思いと、そのようなほんの少しのズレから犯罪を起こし、更生を祈る人の少しでもお手伝いができればと言う思いで、プロジェクトのお手伝いをさせていただいております。

会計業務においては、代表、副代表、事務局長の誠実で不正のない会計処理を行いたいというこれまでの意思を継ぎ、明解で透明な会計処理を行っていきたいと思います。まだ、プロジェクトが立ち上がって1年という事もあり、集計方法の確立できていない部分もありますが、みなさんから預かりした

運営費を大切に、誤りなく管理させていただく事が、安心してプロジェクトをご利用でき、安心してプロジェクトに賛同していただくための基本と考えています。今後も、謙虚に誠実に取り組んでいきたいと思ひます。ご理解とご協力をよろしくお願ひいたします。

~~~~~

おかげ様で

書籍運搬担当 秋元靖男

私は友人でもある事務局長の汪さんに誘われ、このプロジェクトに入会しました。時がたつのが早いと言ひますか、1年と6か月がたちました。

はじめは修道院にて講演会を主宰するから、一度見に来ないかと声をかけられ、講演会を見てから、私も思うことがあって、スタッフとして参加するようになりました。

参加してから、スタッフたちは本当にすごいと思ひました。特に私が一番すごいなあと思つたのは「ワンケロ」

(注釈；ワンケロとは汪とかえるのケロケロから作つた造語であり、イベント担当の女性4人とLINEで連絡する際に作つたグループ名に由来する。現在は井手シスターも加わり、8名になりました。)の皆さんです。このチームの女性の方々は、私からすればなんでもできる人たちで、修道院に行くときには、今日はどのようなことを教えていただけるだろうと、いつも楽しみにして修道院に行つています。正直な話ですが、私は中学校までしか学校に行

つてなくて、それに比べて、ワンケロの皆さんは大卒か、大学院を卒業された方もいて、私の人生の中ではこのようなお方と出会うこともないと思つていました。

その中で一番思ひ出といひますか、講演会後の反省会や、会議の時に皆さんから出されるアイデアが本当に素晴らしく、次回の講演会がまた楽しみになるのが常でした。

そして毎月の定例会の時、パソコンの打ち方といひ、ポンポンと出てくるパソコン用語といひ、とても有能で、私も救われる思ひでした。

私はワンケロの皆さん、そしてプロジェクトの皆さんの力があってこそ正業につくことができました。恥ずかしい話ですが、今まで実社会にて仕事したことがなかつたのですが、いまはそれを改め、まともな仕事をしながら普通の生活を求めるようになりました。

私も45歳になります。急に仕事をしてしまったせいとか、真夏の工事現場で熱中症にかかり、病院へ搬送されることもありました。実社会の厳しさを実感しました。

最後になりましたが、プロジェクトの皆さんはいつも親身になってくれて、人としての気心と情愛を感じさせてくれる。

そのおかげで前科8犯の私でも皆さんのおかげで今までの人生とは少しづつではありますが、変わつてきたと実感していることです。本当に感謝しており、そして心から頼りにしてしています。

世間の目

反省は一人でできても、更生は一人ではできない。このフレーズを法務省でも使われています。更生できないのは何も本人だけに原因があるわけではない。というのが私たちのスタンスの一つでもある。当事者目線で活動することとは、更生の障害になっているものを可視化していくのも務めと考える。

今回は新聞記事読み、素晴らしいと思います、さらに調べたところ、いわゆる世間の厳しい目に遭遇した。このような反対意見は情報が極端制限された刑務所の中では触れることがほとんどない。しかし、出所したらたちまちこの世間の目にさらされ、とん挫するというのが再犯の原因ではないかと思えます。

まず記事を紹介します。

読売新聞

全国の地検で知的障害を持つ容疑者の取り調べ改革が進む中、長崎地検で始まった新たな取り組みが注目を集めている。

地元のNPO法人が障害者の取り調べに専門家を派遣し、福祉施設が刑期を終えた障害者らを受け入れることで、早期の社会復帰につなげる試み。地検が「施設での更生」を条件に裁判で執行猶予を求めて認められる「成果」も出ており、最高検は同様の仕組みを全国に普及させたい考えだ。

「取り調べで、ちゃんと答えられたことは一度もない」。軽度の知的障害が

あり、3月に佐世保刑務所で5度目の服役を終えた男性(74)は振り返る。

2009年、同居していた兄から受けた暴力の憂さを晴らそうと、金もないのに居酒屋で飲み、無銭飲食で逮捕された。取り調べで事情を説明しようとしたが、検事から「否認」や「黙秘権」など難解な言葉を並べられ、あきらめられた。「『やったんだな』と叱られるように聞かれる。言えたのは『はい、すいません』だけ」と男性は話す。

知的障害者の取り調べの見直しは、2年前の大阪地検特捜部の不祥事を受けた検察改革の一環として始まった。障害者が取り調べで誘導されることなどを防ぐため、全国の地検が昨年7月から取り調べの録音・録画(可視化)を始め、これまでに400件以上実施している。

長崎地検では2月から、障害を持つ出所者の社会復帰を支援するNPO法人「長崎県地域生活定着支援センター」が、大学教授や特別支援学校勤務経験者などを助言・立会人に推薦する仕組みを作った。同地検の原山和高次席検事は「容疑者の本音を引き出すことができ、真相解明に役立つ」と評価する。

全国の年間の新規受刑者の約2割にあたる約6000人に障害の疑いがあり、犯罪を繰り返す「累犯障害者」も多い。取り調べで障害を把握し、ケースによっては不起訴や執行猶予とすることで早期に福祉サービスを受けさせられれば、再犯の抑制にもつながる。

2月の長崎地裁五島支部での窃盗事

件の公判では、地検が知的障害のある男性被告に「施設への入所と更生支援プログラムの受講」を条件として、執行猶予付きの懲役刑を求刑し、認められた。被告は、社会福祉法人「南高愛隣会」の施設で更生に取り組んでいる。同会は、3月末までに同じような元被告を延べ80人以上受け入れている。

同会の田島良昭理事長(67)は「犯罪者に刑罰を科すことに重点を置いてきた刑事司法が、犯罪者の社会復帰へつなげる仕組みに変わり始めた。地検と協力し、障害者の自立や更生を後押しできるプロセスを作り上げていきたい」と話す。

最高検の林真琴総務部長は「長崎の取り組みは、累犯障害者の再犯防止と社会復帰につながる第一歩。この仕組みを全国で整えたい」と話している。(岩崎千尋)

この記事に対して、ネットではこのような趣旨の投稿が大半を占める。

林真琴総務部長は帰化人か？
それとも在日犯罪者擁護の関係者か？
こんな奴らに犯罪者を宛がったらみんな無罪の野放しだよ！知的障害でも死刑にする法に変えろ！
これから精神異常者の成り済ましが増えるぞ！クリニックなんかを在日の医者だからな、そこでカルテ詐称すれば、りっぱな犯罪責任を問えない知的障害者の一丁上がりだよ！人殺しのし放題、死刑にならない殺人マシン。

ちなみに林氏は2016年9月に官邸のこり押しで法務事務次官に任命された、いわば政権寄りの人物です。今の政権はタカ派と言われています。それでもネウヨはたいそうご不満である。

一方では、2006年に旧監獄法が改正され、新法は施行されたが、刑務所側の恣意的な運用で今では旧法以上に人権を無視するものに変えられてしまった。名古屋のホース事件で世間は一時的に注目し、その機運で法も改正されたが、世間はすぐに忘れ、今は刑務所のやりたい放題。民主主義の基本である議員立法をも無視して、左翼の好む憲法と右翼の好む天皇が承認した新法を、たかが刑務所長の権限で全部無視してしまう。無視できるこの無法地帯と一番戦っているのは誰？受刑者です。民主主義を守ろうとしているのは受刑者とすら言いたい。その受刑者でもいわゆる願箋マンです。自分が刑務官ににらまれ、時には暴行をも受ける。それを覚悟して刑務官の不正不法不作為を訴えているのに、同じ受刑者がこの人たちに対して協力せず、むしろ刑務官の意思を忖度して暴言暴力を振るう。とは私の個人意見です。

新法の立法趣旨を最もよくまとめた本があります。法廷で刑務所側と争う場合、最も参考になるのはこの本。でも新品で32,668円。中古でも2万円。
逐条解説 刑事収容施設法 改訂版(有斐閣コンメンタール) 単行本 2013/3/23
林真琴, 北村篤, 名取俊也(著)

出所に向けて

出所、この言葉の響きは受刑してみないと、分からないかもしれない。

さて、その出所を目標に生きているといっても過言ではない受刑生活ですが、そのためには準備が必要です。そんな皆さんのために情報を提供するコーナーを設けました。

第1回は誰もが気になる携帯電話について説明します。

受刑されている方の多くは逮捕された時点で家族や友人のサポートがないと、使用中の携帯の料金支払いや解約もできません。また、刑が長いと予想された場合、払わなくても5年あるいは7年経てば支払う必要はないと考え、力説する人も多い。もっとデタラメなのは民法やら商法で2年経てば支払う義務はないと主張する人もいます。

実際はどの大手の携帯会社も一度ブラックになった利用者に対しては、完済しない限りは再契約はさせていません。私が知る限りでは出所者の多くはこの問題にぶつかり、解決する方法のトップは家族の名義で借りる方法です。家族割もあってお得です。私の場合もこうしています。

私はドコモで契約しています。基本使用料は2700円。これは掛け放題のカケホーダイプランというもので、周りに電話しか掛けられない(ガラケーの人)人が多いと、掛け放題にした方がいいと思います。

パケット定額は5000円のXiデータMパックというもので、毎月5GBまで使えます。もっと少ないGB数のプランもありますが、スマホで映画や動画を見る人が多いので、このくらいは必要です。

5GB以上を使ってしまっても電話は普通通りに使えますが、制限が掛かって、ネット回線は急に遅くなり、のろのろ状態になります。月末になると結構ノロノロになりがちです。我慢するか、スマホ上の操作で1GB1000円で購入できます。余ったパケットは翌月に持ち越しができます。

このほかにもXi・SMS通信料が発生しますが、これは昔のショートメールのことで、LINEやFaceBookのメッセージなどを使わない人、使えない人からはショートメールで送られる。それに対して返事すると一回で3円ほどの料金が発生します。私の場合は月に200円ほど利用しています。

他にも付加機能使用料としてSPモードに300円。留守番電話に300円。ドコモWi-Fiに300円。ドコモWi-Fiはほとんどの駅に普及され、このようなWi-Fiを使わないとパケ代が一気に上がります。

これらで毎月1万円の携帯代がかかります。

家族を頼ることができない場合はプリペイド携帯という選択肢もあることはあるのですが、身分証明書がないと買えませんし、割高の上、もちろんiPhoneは使えません。スマホはあります。

もう一つの選択肢はレンタル電話で

すね。毎月 12000 円の料金で、身分証明書がなくても携帯をもてます。でも高いからおすすめできませんね。

実はいま外で携帯だけでは足りません。家電（いえでん、もしくは固定電話といいます）を使ってもかかってくるのはセールスかオレオレ的なものが多いのですが、家にもネット回線を契約しないと、かなり不便です。私は一人暮らしですが、ひかり TV で映画や囲碁麻雀を見ますので月に 5000 円。電話回線に 5000 円。これで事務局の無線 LAN が使えます。

個人だと携帯だけで事足れると考える人もいますが、パソコンを使うなら電話回線の 15000 円は避けられません。

ちなみに iPhone などのスマホ端末は新品だと 10 数万円しますが、分割でも金利は発生しませんので地道に返済していくのもできます。でも毎月の出費を抑えたい場合はさっさと一括で支払いたい。

GEO やら TSUTAYA でもスマホの中古が売られています。iPhone5 は 7000 円。iPhone6 は 27000 円。iPhone7 は 65000 円。

私はずっと iPhone5s を使っていました。こういうデジタルに詳しいほうでも、今のスマホの機能を全部使いこなしているわけではないので、少々古い機種でも問題がないのです。それでも友人が不憫に思ったのか、iPhone6 をプレゼントしてくれた。すごく快適です。悔しいけど、新しい奴はやはり性能もいい。ipad はダメですね。iPhone5 でも一番安い奴で 16GB の容量があって、iPhone6 は

125GB にたいして ipad ミニはわずか 10GB。電車の中で映画を観るのに使おうにも映画 4 本でゲームが入らなくなるし、通話できませんからね。デカすぎて耳に当てるのは疲れるから。これも貰いものですが、家でネットサーフィンと称して動画を見るのとゲームくらいにしか使えません。

で、使わなくなった iPhone5 は家のネット回線でネットにアクセスできるので、iPhone6 の子機として使っています。

出所してまだ 3 年というか、もう 3 年というか（笑）。Windows98 の頃に少しいじっていただけで、パソコンに詳しいとヤンキー仲間に使われています。それでよく質問されます。でも本当はそれほど詳しくない。今回は携帯電話について説明しました。

事務局便り

◎事務局の移転

事務局の移転が終了しました。旧住所でも一年間は転送されますが、受刑中の皆様には新住所での登録を済ませるようお願いします。

事務局の新住所

〒134-0003
東京都江戸川区春江町 5-15-31
ほんにかえるプロジェクト

事務局は忙しいとはいえ、内部会員の会計で 205 円の計算ミスがありました。お詫びいたします。

K・Yさん ソフトボール

大会は準決勝で敗れた。4回まで0-0で、じゃんけんで負けたとか。10年間も喧嘩せずに堪えてきたのに、もったいないですね。メシのズケ盛で喜んでいるような奴はしょせんそのレベルですから、忘れてください。

0・Hさん、日商簿記2級に合格して、おめでとうございます！そしてビジネススキル科の受講も決まるよかったですね。「自分が変われば、周りも変わる」いい言葉です。同じ意味と思うのですが、私は「変えられるのは自分だけ」を信条とし、周りが変わってくれば甘いな考えを持たないようにしています。すみませんでした。ご寄稿していただいたのに、よりによって、おくれた「かえるのうた」が落丁していて、ご寄稿の部分が抜けていました。

0さん、父親に「お前な、カカアの腹にできてしもたけど、おろす金がないから大きくなってしまっ」生まれたと言われようと、今の自分がいるわけですから、気にすることはない。どうしても気にしてしまうのも人間だけど、私は今も父を許せないのと同じ、それでも生きなきゃならないのですから、苦しめない方法で生きよう。それに許さないと自分も許されないのです。

H.Sさん、1000人も収容されていた時期にいた者としては、610人しかない現状を想像もできません。舎房に3人しかないのはうれしいことですが、自分以外の二人は無期懲役刑の方とは何とも気を遣う環境でしょうね。溶接とはご苦労さん。

お知らせ

宮城刑務所をはじめ、いくつもの刑務所では郵送差し入れの制限を厳しくしています。事務局ではあの手この手でいかにも多くの本をお届けできますように工夫していますが、度重なる刑務所側の恣意的な内規変更で翻弄されています。

具体的にいえば、1日3冊しか差し入れを認めなくなり、プロジェクトのように同じ住所で別々のスタッフが発送した郵送物も受け取りを拒否されるようになり、送り返されています。

一方では郵便局との契約で3センチまでの郵送物しか安く送ることができず、しかも契約者の名前でしか送れないため、事務局では2名義でしか送ることができません。

ここで朗報その一。

ゆうメールの審査が通りました！

ゆうメールを使えることにより、一度にたくさんの本を送れるようになりました。やった！

プロジェクトには20名以上のスタッフが在籍しています。皆さんが協力してくだされば、1日で20個の荷物を送れることとなります。特に受刑中のかえるメイトならこの意味を分かりますよね。楽しみにしてください。

ゆうメールを使えるようになったことで、転送作業もいくらか楽になる見込みです。リクエストされる方、特に送料を負担してくださっている方、どんどん頼んでください。どんどん送りますから、受刑生活をより有意義になるように頑張りましょう。

ここで少し嫌な話をしますが、アンケートの調査では過半数以上の会員から送料を300円に変更することに賛成するという意見をいただきましたので、送料を300円に変更いたします。なお、賛成していない会員もいますので、送料として300円を徴収しますが、申し出ていただければ、旧料金のママで対応いたします。値上げは財政難の改善の一環で行うものであり、活動を継続していくために、やむをえず取った措置であり、どうかご理解ください。

ここで朗報その二。

ほんにかえるプロジェクトの活動に賛同し、特に被収容者会員の方が口コミで宣伝してくれました。しかし、スタッフ不足で新規会員の受け入れができず、せっかくのご好意に応えることができませんでした。

ここにきて、以下の条件が重なり、2部の無償本提供会員と、3部の新規入会の受付ができるようになりました。

- ◎ 広報担当のスタッフが事務局の会計業務を負担してくださるようになり、常勤スタッフの3人が発送作業に割く時間ができたこと。
- ◎ 財政難で会費収入を増やさないとともにや活動そのものの継続が難しくなっていること。
- ◎ ゆうメールが使えるようになって、書籍の発送がより簡単に、より計画的にできるようになったこと。

ご応募、お待ちしております。

ほんにかえるプロジェクトは会員を募集しています。正会員の年会費は3000円。寄付もお待ちしております。

振込先

ゆうちょ銀行 10160-86239211

他行からの場合

ゆうちょ銀行 018 支店

(普) 8623921

口座名義は

ほんにかえるプロジェクト

ほんにかえるプロジェクトはボランティアスタッフを募集しています。在宅のままでできるパソコン入力と文通スタッフが特に不足しています。自宅の住所を公開する必要もありません。プライバシー保護に細心の注意を払っております。

プロジェクトの活動資金の捻出の一環としてオリジナル葉書のほかに小冊子も販売するようになりました。第1冊目は汪が書いた「私の生き立ち」(A5サイズ 88頁)、500円で販売し、その収益は全額支援活動に充てます。好評につき、手作業で増刷中です。

発行所

〒134-0003 東京都江戸川区 春江町 5-15-31 ほんにかえるプロジェクト事務局

責任編集 汪楠 (わんなん)

電話 080-8811-5465